

[研究ノート]

ミクロストリアと質的研究法

鈴木 良和

1. はじめに

本稿は、先端課題研究19「質的研究アプローチの再検討」ならびにJSPS 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業：領域開拓プログラム「分野間比較を通じた質的研究アプローチの再検討」の一環として実施された歴史学分野における文献サーベイである。伝統的には人文科学に位置づけられる歴史学は、いかに大々的に量的な手法を採用したとしても、いずれかの場面で必ず質的な考察が不可欠となる、そのような学問である。ところが歴史研究においても量的研究のトレンドが生じ、量的方法こそが歴史学を「真の科学」に変えることができるという期待をともないつつ、系列的な史料の統計分析を主軸とする「系の歴史学」⁽¹⁾が一時期、歴史研究の主流派の位置を占めるに至った。こうした傾向がまさに頂点に達したと言えるのが1960-70年代であり、1969年にはエマニュエル・ル・ロワ・ラデュリをして、「定量化不可能な歴史学は科学的ということはできない」と言わしめたのである⁽²⁾。本稿のサーベイ対象である「ミクロストリア」は、歴史学のこのような動向に対する反省を背景として1970年代のイタリアで誕生した。以下、まずはミクロストリアを代表する二人の歴史家の方法論を取り上げ、ついでポストモダニズム、グローバルヒストリー、新たな量的研究の視座からその後のミクロストリアの展開を概観したい。

2. カルロ・ギンズブルグ

ミクロストリアの旗手として広く知られるカルロ・ギンズブルグは、1979年の有名な論考⁽³⁾において、一見取るに足りない細部から事柄の全体性を見通す知としての「徴候解読型パラダイム」(paradigma indiziario)⁽⁴⁾が、19世紀末に人間科学の領域で登場したことを明らかにしている。このタイプの知として具体的に名前が挙げられているのは、手や耳といった見過ごしやすい細部から絵画の作者を明らかにする鑑定術や、残された僅かな痕跡から犯人を探し出す探偵の手法、さらには身体の表面的な症状から病気を診断する医学などである。興味深いことに、ギンズブルグはこのような知の系譜を狩猟という人間の最古の営みにまで遡らせる。旧石器時代の狩人は、足跡一つからどの動物がいついかなる状態でその場所を通ったかを推理できたのであり、それこそが彼らが生き残るために必要な知であった。個別的なものの観察から現象の全体や原因を把握しようとする人間の知の系譜をギンズブルグがこうして辿ってみせるのは、数量化と現象の反復性とを前提とする「ガリレオ的パラダイム」に支えられた社会科学に対して、推理的な仕方では個別的なものを扱う知の在り方として人間科学を規定しなおし、そのような営みの中に歴史学を取り戻そうとしていたからであった。この徴候解読型パラダイムこそ、歴史学におけるきわめて意識的に実践された質的研究であって、それがミクロストリアという歴史学の一つの潮流として表

れたのである。

この徴候解読的な方法の注目すべき特徴としてまず指摘しておきたいのが、統計分析においてはふつう孤立した例外として無視されてしまうような極限的な事例を研究対象として選択することである。自ら書かれた史料を残すことができなかった「従属的諸階級」の文化について、歴史家が支配階級の側からではなくその文化を生きる人びとの内部の視点から理解することを望む場合には、そこには初めから大きな困難が予想される。異端審問記録は民衆の声を直接記録した史料として重宝されるが、そうとは言ってもそれは支配階級に属する人間によって書かれた文書であって、一方には裁判官による歪曲、他方には被告人による隠蔽という二重の覆いが掛けられているのである⁽⁵⁾。このような困難にもかかわらず、歴史家が民衆自身の声を記録から回復させたいと望むのであれば、この覆いに裂け目を生じさせるような事例を発見しなくてはならない。そうした可能性を秘めているのが、『チーズとうじ虫』⁽⁶⁾の主人公である粉挽屋メノッキオのような極限的な事例である。ギンズブルグはメノッキオの異端審問記録から、彼が実際に読んだ本と裁判中の彼の告白との間に存在するズレを一つ一つ明らかにしていく。このようなズレこそがメノッキオの思想世界の背後に隠れた何ものかを復元するための徴候として機能するのである。

次に、このような徴候を実際に読み解くための方法として注目に値するのが、一つ一つのズレを統一的な解釈に結びつけていくための仮説が歴史家の側にあらかじめ想定されている点である⁽⁷⁾。メノッキオの場合には「はるかむかしにさかのぼる農民社会の伝統の暗く闇に閉ざされた、ほとんど読解不可能な地層」⁽⁸⁾というのがそれであって、これこそがメノッキオの特異な読書を可能にしたバイアスの源泉であると仮定される。つまるところ、ギンズブルグ自身が「イーミックな展望はエティックな展望を媒介にしてのみ把握可能となる」と述べているように⁽⁹⁾、彼の研究は仮説という学問的な解釈格子をあらかじめ設定することによって初めて成立している。ギンズブルグの方法に寄せられる批判の多くも、このようにして設定された仮説の妥当性を問題にしていると言えるだろう。実際、彼の解釈格子が還元的であるというドミニク・ラカプラの批判⁽¹⁰⁾や、彼の文化的文脈化の手続きが恣意的で適切に制御されていないというシモーナ・チェルッティの批判⁽¹¹⁾などもこの点に関係している。確かに仮説を前提とする方法には解釈学的な循環に陥る危険性があるかもしれないが、そうとは言ってもエティックな展望を持つことそれ自体は学問研究にとって不可欠であろう。結局、重要なのはそれがいかに制御されているかである。

ギンズブルグに即してこの問題を検討しているのがエドワード・ミュアーとマイルズ・フェアバーンである。ミュアーは推理的な証明の方法として細部の比較に基づく積極的方法と、一つの仮説が残るまで他の仮説をふるい落とす消極的方法の二つを挙げた上で、ギンズブルグのミクロストリアの論理過程がチャールズ・パースのアブダクションに類似している点を指摘する⁽¹²⁾。またフェアバーンは、断片的な証拠から主張を一般化するための方法について分析した著作の中で、ギンズブルグが『チーズとうじ虫』において「観察の多様さと重さの最大化」、「対抗仮説の振るい落とし」という二つの手続きを実行している点を指摘し、彼の議論の説得性を非常に高く評価している⁽¹³⁾。

ギンズブルグの研究のその後の展開についても若干触れておくと、彼は構造的な相似性に注目することで、16世紀のイタリアで異端審問官によりサバトと解釈された実践をシベリアの太古のシャーマニズムに接続させるという人類学的形態論に依拠した大胆な研究を実践した⁽¹⁴⁾。ここにおいて彼のミクロストリアは人類学と結びつくことにより、通常の歴史研究ではほとんど不可

能と思われるようなマクロな次元で展開するに至ったのである。ギンズブルグの諸研究は多くの歴史家に影響を与えることになったが、彼の方法論そのものには他の歴史家が容易に真似することのできないような唯一無二な性格があることも否めない。

3. ジョヴァンニ・レーヴィ

ジョヴァンニ・レーヴィは、ギンズブルグとともにミクロストリアの歴史家たちの中心的存在であったが、彼とはまた異なるタイプのミクロストリアを構想していた。レーヴィはミクロストリアが登場してきた際の歴史家たちの問題関心について2012年に改めて回顧しているが⁽¹⁵⁾、それによるとミクロストリアの誕生はそもそも政治的原因に由来していたという。労働者階級の伝統から生まれたイタリアの左翼は、社会構造の静態的なモデルで自らの立場を固めており、所属する階級に応じて自動的に政治的、イデオロギー的選択を行なうという観念に依拠していた。ところが、イタリアの苛烈な政治的状况は左翼による政治分析の限界や甘さを浮き彫りにし、社会と経済の仕組みに生じた甚大な変化を前にしては、過度に単純化した解釈が本質的に不毛であることを悟り始めたのである。このような政治状況から『クアデルニ・ストリチ』誌の編集チームの間では、「複雑さの回復」に焦点を当てた議論が行われるようになり、1981年にはついにエイナウディ出版から「ミクロストリア叢書」が刊行されるに至った。レーヴィは以上のようにミクロストリアが誕生した経緯について語っている。

歴史研究に複雑さを取り戻すためには観察のスケールを縮小するという手続きが不可欠であった。この手続き自体はギンズブルグの方法とも共通しているが、両者の関心は大きく異なっていたと言ってよいだろう。ギンズブルグが主として文化的意味の解釈を試みたのに対して、レーヴィの関心は日常において人びとが取り結ぶ社会関係にあったからである。レーヴィは諸個人の織りなす社会諸関係や日常的戦略によって社会が構築されるといういわゆるソシアビリテ論的な視点に立つことで、個々の行為者を一貫した規範や構造の内へと還元するのではなく、むしろ規範的システムの間隙をぬって機能する個人や家族の日常的戦略に注目し、社会的変化の源泉を個々の行為者の相互作用のレベルで捉えようとした⁽¹⁶⁾。ポール＝アンドレ・ローゼンタールは、ノルウェーの人類学者フレデリック・バルトの議論を参照することで、こうしたレーヴィの社会的ミクロストリアの方法論を理論的に説明している⁽¹⁷⁾。それによれば、彼の方法は現実を生み出すメカニズムを可能な限り網羅的に説明したいという欲求から生み出されたアプローチであり、観察結果の全ての構成要素に等しく注意を払った上で、それら全てを同一のプロセスで説明できるような生成モデルの構築を目指していたという。

こうしたレーヴィのミクロストリアには、ミクロな観察によって構築された生成モデルがそもそもどこまで一般化可能なのかという問題もあるが⁽¹⁸⁾、レーヴィ自身はむしろ典型的な事例が存在するという考え方自体を否定し、歴史家が一般化できること、あるいは一般化すべきことは問いであるとして次のように述べている。「歴史学とは事例の特殊性に焦点を当てるとともに、そうした事例の帰結ではなく、事例から生じる問いを一般化する学問である。同じ問いは異なる文脈において投げかけることができるが、それは類似点や相似点を引き出そうとするためではなく、特定の事例における妥当な答えを見つけるためである。したがって、歴史学はいくつかの、あるいは一つ特定の事例から出発して、それぞれの事例の有機的諸関係や、諸々の出来事の解

積をその固有性を失わずに文脈化してくれる一般的な問いを特定するのである」⁽¹⁹⁾。

以上のように、観察スケールの縮小という点ではギンズブルグとレーヴィは共通しているものの、両者のミクロストリアの実践は大きく異なっていた。そのため、エドアルド・グレンディはミクロストリアを「文化的」、「社会的」の二つに分類し⁽²⁰⁾、以降多くの歴史家がこの区別を踏襲することとなった。チェルッティは、この二つの方向性の存在を明確にせず、徹底的な考察を行わなかったことがミクロストリアに関して多くの誤解を生む原因になったと述べつつ、彼女自身はむしろこのような固定的なラベル貼りを批判し、文化モデルの分析と行動の分析を接続することによって意味の分析をより深いレベルで実践する方法を模索している⁽²¹⁾。レーヴィやギンズブルグの歴史学が抱える根本的な課題については、上村忠男が近代学問批判の立場から、個別化的認識の一般化やマイクロとマクロの間の存在論的な差異といった点について透徹した考察を行っているが、いずれのミクロストリアを選択するとしても、上村が指摘するように「一般化ないし形式化の問題」が「前途に重く立ちはだかっている」ことは確かなようである⁽²²⁾。

4. ミクロストリアとポストモダニズム

さて1980年代以降、ポストモダニズムや言語論的転回の影響の下、従来の歴史学を再考しようという流れの中で、大きな物語に対する批判、物語りの復活、個人や主体性の復権といった動きが生じると、こうした主題をミクロストリアと結びつける歴史家たちが登場した。ヤン・ド・フリースは、断片から普遍的なプロセスを観察するイタリアのミクロストリアと、普遍的なプロセスや一般化された主張そのものを退けるポストモダニズムの影響を受けたミクロストリアとを区別している⁽²³⁾。後者のタイプを代表するシグルズル・ギルヴィ・マグヌソンは、既存の歴史学がメタ・ナラティブと結びついていることを批判し、「歴史の単数化」と彼が呼ぶ方法を提示した⁽²⁴⁾。このアプローチは、調査する出来事や現象の内側に目を向け、細部におけるすべての側面に注目し、それらが有するニュアンスを明るみに出すことによって、研究対象に固有の論理的・文化的文脈の中で研究することを目指すというものである。マグヌソンの批判の主たる対象は文化史と社会的ミクロストリアであったが、彼のアプローチの場合、先立って仮説を設定すること自体が退けられてしまうため、ギンズブルグの徴候解読的な方法とも相容れないものになっている。こうしたマグヌソンのアプローチは、ド・フリースが指摘するように、他の研究対象との関係（交換や接続）について物語る可能性を完全に否定するものであり、このような方法を主張した歴史家たちがその主張通りに研究を実践することはほとんどなかったようである⁽²⁵⁾。

ミクロストリアの方法論は、歴史叙述の形式がどうあるべきかという問題とも不可分であった。そもそもギンズブルグには、徴候解読型パラダイムに属する歴史叙述は必然的に物語り的にならざるをえないという方法論的自覚があり、実際にも彼の個別研究では一貫してこの様式が採用されていた⁽²⁶⁾。ところが、ミクロストリアのこのような特徴は、ポストモダニズム以降の歴史家たちの新たな関心と結びつくことで、ギンズブルグの方法論的自覚とはまた異なるところで受容されたようである。フランチェスカ・トリヴェットは、英語圏のミクロストリアの特徴として、大胆な方法論よりも物語りの形式で書かれている点を強調し、特に「新しい文化史」の最盛期に生じた英語圏でのミクロストリアの受容は、誰もが好奇心をそそられて読者の共感を呼ぶような周縁的な人物に光を当て、窮屈すぎると思われる証拠の基準から歴史家たちを解放し、学問

的な歴史研究に多くの読者を獲得するためのツールになったと指摘している⁽²⁷⁾。

ミクロストリアが個人を研究対象として重視したことは、「個人」、「自己」、「主体性」、「主観性」といった主題を歴史学に復権させ、いわゆる「ふつうの人びと」を研究対象とするエゴ・ドキュメントに焦点を当てた歴史研究を生み出す上でも決定的な役割を果たすことになった⁽²⁸⁾。また、近年では「歴史上の周縁的な人物は、これまで共同体として認識されてこなかった集団を代表するものとしてみなしうる」⁽²⁹⁾という、いわゆる「正規なる例外」の考え方を転倒させ、むしろ従来ある集団を代表すると考えられてきた人物であっても、観察尺度を変えれば個人の主体性における不一致を示すことができ、そこから固定化した歴史の語りに修正を迫るような新たな認識が得られるのではないかという視点が登場している。このような傾向は近年のバイオグラフィ研究の新たな展開と結びついており、これをハンス・レンダースとダヴィット・ヴェルトマンは「ミクロストリアの第三の波」と呼んでいる⁽³⁰⁾。

5. ミクロストリアとグローバルヒストリー

「歴史学の危機」以降、大きなスケールで歴史を語ることのできる数少ないアプローチとしてグローバルヒストリーが一つのパラダイムとなったが、そこには当初から様々な問題点が指摘されてもいた。例えば、グローバルな射程を有する歴史叙述においても、新たに復権してきた「個人」、「主体性」、「主観性」、「偶然性」といった主題を十分に扱う余地はあるのだろうか。グローバルヒストリーとミクロストリアの接続が歴史家たちの注目を集めているのは、それがこうした問題を解決する方法だと考えられているからである⁽³¹⁾。ミクロストリアが数量的歴史学だけではなく、ブローデル流の構造重視の歴史学とも異なる方法を意図していたとすれば、人間の主体性を歴史学はどのように叙述するのかというある意味で古くからの問題が、グローバルヒストリーとミクロストリアの対立にも現れているのかもしれない。トニオ・アンドラーデは2010年の論文において、既存のグローバルヒストリーが世界史の構造やプロセスをモデル化しようとすることに偏重し、歴史を生きたものにする人間のドラマを軽視する傾向があるとして、モデルや理論に現実の人びとを住ませようとするミクロストリア的、バイオグラフィ的アプローチを採るように呼び掛け、それを「グローバル・ミクロヒストリー」と名付けた⁽³²⁾。

2001年の『アナル』誌特集号「グローバルな規模の歴史」において、セルジュ・グリュジンスキはグローバルとローカルが互いに変奏され接続されていく空間として「カトリック王国」を描き出してみせた⁽³³⁾。その際に彼がサンジャイ・スブラフマニヤムに依拠しつつ提示した「接続された歴史」は、ミクロストリアに対する批判に基づいていたものの、ある意味ではグローバル・ミクロヒストリーを先取りしていたとも言える。だが今回はむしろ、ミクロストリアとの接続がグローバルヒストリーにとって有益であるという認識が共有されているのである。近年のグローバル・ミクロヒストリーの流行は、2018年に『アナル』誌が、続く2019年に『過去と現在』誌が相次いでこれをテーマとする特集号を組んだことから明らかであろう。

これらの特集号に寄稿した歴史家たちは、多様な仕方で両者を接続する方法を模索している。例えば、クリスチャン・デ・ヴィトは、この方法として従来有力視されてきたジャック・ルヴェルの「スケールのはたらき」(jeux d'échelles)に基づくアプローチを批判し、このような視点の取り方がマイクロとマクロに全く異なる発見の可能性を与えてしまうことで、グローバル・ミクロ

ヒストリーが克服しようとするグローバル／ローカル、構造／主体性という分断をむしろ固定化し強化することにつながると指摘する⁽³⁴⁾。それに代わりデ・ヴィットの提示する「マイクロ・空間的歴史学」は、スケールという考え方自体を排した「空間的な」視野でマイクロ分析を行うことにより、従来のマイクロとマクロという二項対立、さらには短期分析と長期分析という時間的な対立をも克服しようとする試みであった。

グローバル・マイクロヒストリーの成果に大きな期待が寄せられる一方で、ヤン・ド・フリースはこのアプローチが抱える課題についても指摘している⁽³⁵⁾。彼が問題視したのは、ミクロストリアとグローバルヒストリーが共に、研究の時間的なスケールを短期に設定し、共時的な関係性に注目するという点で共通していることである。ド・フリースによれば、それだけでは時間的な変化を説明するという歴史家が向き合わなければならない問題には対処できない。そのため、ミクロストリアとグローバルヒストリーが実り豊かに接続するためには、共に時間的な変化の研究と接続し、理論に対してももっと意識的になる必要があるという。

6. ミクロストリアと新たな量的研究

ミクロストリアが時間的な変化を十分に説明していないというのは、ジョー・グルディとデイヴィッド・アーミティジが『歴史学のマニフェスト』（原著2014年）で引き起こした論争の争点でもあった⁽³⁶⁾。彼らは、歴史家が社会において公的な役割を失ったのは、マイクロな歴史学の台頭により歴史研究に長期の視点が失われたためであると主張して、ビッグデータの分析を利用した「長期持続」への回帰を呼びかけた。この論争は多くの反響を引き起こし、2015年の『アナール』誌上では五人の歴史家がグルディとアーミティジに対して批判的に応答した。

例えばトリヴェットは、マイクロなスケールの歴史研究がすべて政治的な領域から切り離されていたわけではないし、小さな研究対象が歴史学の議論に大きな影響を与える場合があったことを実際の研究事例を挙げながら反証している。さらに、彼女は歴史家が公的な問題に関する助言者の地位から後退した要因に関しても、グルディとアーミティジは歴史家たちのマイクロな研究への嗜好をただ告発するばかりで、歴史学そのものの地位に影響を与えた外的要因の検討を放棄している点を批判した⁽³⁷⁾。また、クレール・ルメルシエは、「長期持続」への回帰という著者らの主張にもかかわらず、彼らは新たに登場したカウントツール（Google BooksやPaper Machines）をただ賞賛するばかりで、因果関係、説明、メカニズム、プロセスといった主題にはほとんど言及することなく、社会科学の議論を避けていると批判する⁽³⁸⁾。こうした指摘に対して著者らは「野心的な歴史学」のために」と題する論考で再応答した⁽³⁹⁾。歴史学ひいては人文科学が現在直面している複数の危機に対して、歴史家は自覚的になり対処しなければならないという彼らの問題意識は確かによく理解できるころではある。しかしながら、彼らの議論は、ルメルシエとクレール・ザルクが「過去の分裂を復活させた」と否定的に評価しているように⁽⁴⁰⁾、極端な点があることは否めないのではないかと。

質的方法と量的方法が必ずしも対立するわけではないということはギンズブルグやレーヴィのようなマイクロストリアの第一世代ばかりでなく、ミシェル・ヴォヴェルのような系の歴史家たちにも早くから認識されていた⁽⁴¹⁾。「今日重要なのは、この二つのアプローチがベクトルを異にすることを認めた上で、それぞれの視点から提起される論点を、相互に投げかけ合うところにあ

るだろう」⁽⁴²⁾という二宮宏之のかつての指摘は今日においても有効であるように思われる。それにもかかわらず、1970年代以降に生じた量的研究への幻滅は、多くの歴史家が数量化を異質な方法と見なす結果をもたらしてしまったこともまた確かであろう。ルメルシエとザルクの手になる『人文学における数量的方法』⁽⁴³⁾は、このような現状を変えるための一助となるべく書かれた量的研究のガイドブックである。著者らは、人文的アプローチと社会科学的方法の不幸な分業を克服するために、質的研究にも役立たせることのできる複数の量的方法を紹介している。例えば、同書の第五章では、マイノリティや個人の主体性を無視することなく一般的な結論を導き出すことのできる方法として、ネットワーク分析とイベントヒストリー分析の手法が紹介されている。このような量的方法は、著者らによれば、歴史家たちがその有用性のために自分の道具箱に入れておくことのできる手段の一つであり、歴史家の直観や創造性を制限するのではなく、むしろそれらを刺激することができるのである⁽⁴⁴⁾。

7. おわりに

以上、本稿はミクロストリアの展開を史学史的に辿りつつ、重要と思われる文献を何点か紹介してきた。この調査を締めくくりに当たって一つ指摘しておきたいのは、1970年代からその後約40年の間に生じたミクロストリアの変遷は、歴史家たちの新たな学問的関心と結びつくことによる方法論上の多元化というべきであって、ギンズブルグの方法を乗り越えるようなかたちで展開したわけではなかった、ということである。そのため、ギンズブルグのミクロストリアは今でも全く色あせておらず、読むべき価値を失っていない。とりわけ、歴史学において個別的研究の有する射程について論じる場合には、彼の徴候解読的な方法は今でも有効な参照軸となっている。ミクロストリアが提起した問題に日本で取り組み続けているのは上村忠男であるが、私たちがまたそれぞれ研究の現場で、この課題に向き合いつづける営為が必要であろう。上村が日本の読者のために独自に編集したギンズブルグの『ミクロストリアと世界史』は、グローバリゼーションを基調とする世界にあって、「一個の事例研究^{ケース・スタディ}の、対象に近接した分析がはるかに広大な（まさにグローバルな）もろもろの仮説への道を開くこともありうる」⁽⁴⁵⁾という視点のもとに、経験的研究に基づく方法論的な諸論考を収録した書物であり、今後のさらなる議論のための重要な手がかりになると思われる。

付記

本稿は、井頭昌彦編著『質的研究アプローチの再検討—人文・社会科学からEBPsまで』（勁草書房、2023年）掲載のコラム「ミクロストリア」をもとに、大幅に加筆修正したものである。

注

- (1) 二宮宏之『歴史学再考—生活世界から権力秩序へ』日本エディタースクール出版部、1994年、293-298頁。
- (2) Emmanuel Le Roy Ladurie, “The Quantitative Revolution and French Historians: Record of a Generation (1932-1968)”, *The Territory of the Historian*, The University of Chicago Press, 1979, p. 15.
- (3) カルロ・ギンズブルグ（竹山博英訳）「徴候—推論的範例の根源」『神話・寓意・徴候』せりか書房、1988年、177-226頁。

- (4) 「徴候解読型パラダイム」とは上村忠男による訳である（『歴史家と母たち—カルロ・ギンズブルグ論』 未来社、1994年、147頁）。なお竹山博英はそれに「推論的範例」という訳語をあてている。
- (5) 上村忠男『クリオの手鏡—二十世紀イタリアの思想家たち』 平凡社、1989年、246-247頁。
- (6) カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫』 みすず書房、2012年。
- (7) 上村『クリオの手鏡』、252頁。
- (8) ギンズブルグ『チーズとうじ虫』、26-27頁。
- (9) カルロ・ギンズブルグ（上村忠男編訳）「わたしたちの言葉と彼らの言葉」『ミクロストリアと世界史』 みすず書房、2016年、75頁、注31。
- (10) ドミニク・ラカプラ（前川裕訳）『歴史と批評』 平凡社、1989年、66-67頁。
- (11) Simona Cerutti, “Microhistory: Social Relations versus Cultural Models”, in Anna-Majja Castrén, Markku Lonkila, and Matti Peltonen (eds.), *Between sociology and history: essays on microhistory, collective action, and nation-building*, Finnish Literature Society, 2004, pp. 17-40.
- (12) Edward Muir, “Introduction: Observing Trifles”, in Edward Muir and Guido Ruggiero (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, The Johns Hopkins University Press, 1991, pp. vii-xxviii.
- (13) Miles Fairburn, *Social History: Problems, Strategies and Methods*, Macmillan, St. Martin’s Press, 1999, pp. 77-81.
- (14) カルロ・ギンズブルグ（竹山博英訳）『闇の歴史—サバトの解読』 せりか書房、1992年。
- (15) Giovanni Levi, “Microhistory and Recovery of Complexity”, in Susanna Fellman and Marjatta Rahikainen (eds.), *Historical Knowledge: In Quest of Theory, Method and Evidence*, Cambridge Scholars Publishing, 2012, pp. 121-132.
- (16) 北原敦「日常の実践の歴史学へ—喜安朗氏の近業によせて」『思想』 848号、1995年、28-32頁。
- (17) Paul-André Rosental, “Construire le ‘macro’ par le ‘micro’ : Fredrik Barth et la microstoria”, in Jacques Revel (ed.), *Jeux d’échelles: la micro-analyse à l’expérience*, Gallimard: Seuil, 1996, pp. 141-159.
- (18) Brad S. Gregory, “Is Small Beautiful? Microhistory and the History of Everyday Life”, *History and Theory*, 38-1, 1999, p. 108.
- (19) Levi, “Microhistory and Recovery of Complexity”, p. 128.
- (20) Edoardo Grendi, “Ripensare la microstoria?”, *Quaderni srorici*, 29-2, 1994, p. 541.
- (21) Cerutti, op. cit., pp. 17-40.
- (22) 上村『歴史家と母たち』、141頁。
- (23) Jan de Vries, “Playing with Scales: The Global and the Micro, the Macro and the Nano”, *Past & Present*, 242, Issue Supplement 14, 2019, pp. 23-25.
- (24) Sigurður Gylfi Magnússon, “‘The Singularization of History’: Social History and Microhistory within the Postmodern State of Knowledge”, *Journal of Social History*, 36-3, 2003, pp. 701-735.
- (25) De Vries, op. cit., p. 25.
- (26) 上村『クリオの手鏡』、249頁。
- (27) Francesca Trivellato, “Is There a Future for Italian Microhistory in the Age of Global History?”, *California Italian Studies*, 2-1, 2011.
- (28) 長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』 岩波書店、2020年、7頁。
- (29) Hans Renders and David Veltman, “The Representativeness of a Reputation: A ‘Third Wave’ in

- Microhistory”, in Hans Renders and David Veltman (eds.), *Fear of Theory: Towards a New Theoretical Justification of Biography*, Brill, 2022, p. 192.
- (30) Ibid., pp. 191-194.
- (31) De Vries, op. cit., p. 28.
- (32) Tonio Andrade, “A Chinese Farmer, Two African Boys and a Warlord: Toward a Global Microhistory”, *Journal of World History*, 21-4, 2010, p. 574.
- (33) セルジュ・グリュジンスキ（竹下和亮訳）「カトリック王国—接続された歴史と世界」『思想』937号、2002年、71-115頁。
- (34) Christian G. De Vito, “History Without Scale: The Micro-Spatial Perspective”, *Past & Present*, 242, Issue Supplement 14, 2019, pp. 348-372.
- (35) De Vries, op. cit., pp. 23-36.
- (36) デイヴィッド・アーミテイジ、ジョー・グルディ（平田雅博・細川道久訳）『これが歴史だ！—21世紀の歴史学宣言』刀水書房、2017年。
- (37) Francesca Trivellato, “A New Battle for History in the Twenty-First Century?”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 261-270.
- (38) Claire Lemerrier, “A History Without the Social Sciences?”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 280-281.
- (39) David Armitage and Jo Guldi, “For an “Ambitious History”: A Reply to Our Critics”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 293-303.
- (40) Claire Lemerrier and Claire Zalc, *Quantitative Methods in the Humanities: An Introduction*, University of Virginia Press, 2019, pp. 19-20.
- (41) Michel Vovelle, “Histoire sérielle ou « case studies »”, in *Histoire sociale, sensibilités collectives et mentalités mélanges Robert Mandrou*, PUF, 1985, pp. 39-49.
- (42) 二宮、上掲書、298頁。
- (43) Lemerrier and Zalc, op. cit.
- (44) Ibid., pp. 155-156.
- (45) ギンズブルグ『ミクロストリアと世界史』、178-179頁。

[査読を含む審査を経て、2023年6月23日掲載決定]

(一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程)